

## 終助詞としての「し」の機能－日本語教育の観点から－

榊原芳美

### 要旨

本稿では、従来接続助詞として扱われてきた「し」が、終助詞及びスタンスマーカ―として機能することを検証、考察する。検証の結果、話し言葉、書き言葉共に「し」が「ね」「よ」と同様に終助詞として働き、話し手・書き手の「情緒的スタンスマーカ―」「認知的スタンスマーカ―」としての役割を果たすことが分かった。「話題に対する新たな情報の付加」を基本的な機能とし、断定回避、和らげ、意見の裏づけ、仲間意識の喚起、などの役割を担う。そのため、共同発話や談話展開においても「し」の使用は重要であると言える。本稿ではスタンスマーカ―としての「し」の機能を踏まえ、日本語教育における効果的な「し」の導入、練習も考察、提唱する。

【キーワード】 し、終助詞、情緒的スタンス、認知的スタンス、日本語教育

### 1. はじめに

辞書の大辞林によると、「し」は「①事実や条件の並列、強調 ②理由、原因 ③結果、判断を暗示く終助詞的な用法>、④相反する条件、事柄の並列」等を表す。日本語教育では「し」は接続助詞として主に「理由などの並列」(Endo, 1986 等)、「和らげ」(Makino & Tsutsui, 1986)の機能が指導される。また、単純な列挙(飯間 1999)、「断定回避」(佐竹 1995)の機能も持つとされている。一方、大辞林に「終助詞的な用法」との指摘がある通り、終助詞として独自の機能があるとも考えられる。

以下の例文(1)はオフィス用プリンターのコマーシャルフィルムからの引用であるが、「し」が多用されている。

(1) セイコーエプソン コマーシャル 2004年7月放送<sup>(1)</sup>

<女子社員柴崎がオフィスの様々な所にプリンターを置こうとしている>

上司： 柴崎君。

柴崎： 置けちゃう。

<柴崎が上司の机の上にプリンターを置く> 上司：そこ、私のデスクだし。

<ロッカーの上にプリンターを置く> 上司：そこだと届かないし。

<部長の膝の上にプリンターを置く> 上司：部長の膝の上だし。

<部長と上司がプリンターを持っている> 上司：部長に持たせてるし。

柴崎： 置けちゃう、置けちゃう。 <柴崎、走っている>

上司： そっちは隣の会社だしー。

このように現在では従来の接続詞とは異なる「し」の用法が見られる。本稿ではこのような「し」が終助詞としても機能するのではないかと考え、Ochs (1996) の提唱するスタンスマーカの観点から検証した。さらに日本語教育でどう指導すべきかについて研究してみる。

## 2. スタンスマーカとしての「し」

まず、スタンスマーカとしての「し」について検証する。例文は主にインターネットや雑誌の対談、小説、テレビ番組、生の会話から収集し、書き言葉と話し言葉の両方を考察した。

Ochs (1996) のスタンスマーカとは何か。まず、情緒的スタンスが指示物、命題や聞き手に対する話者の感情、気分、態度などを指すのに対し、認識的スタンスとは知識の出所、自分の発話についての確信やコミットメントの態度など、ある命題についての話者の知識や信念の何らかの性格をいうものである。(湯川 1999)

次節では、この Ochs (1996) の指標モデルに基づき、「し」が終助詞として他の「わ」や「よ」と同様に話し手のスタンスをマークすることを検証していく。

### 2.1 会話における「し」の機能

まず、会話の展開における「し」について考察する。以下の例 (2) (3) に見られるように相手の発話を「し」が受けることがある。

(2) <生の会話>

A: もう、最近は「とりあえず、ブロッコリー買っとけ」みたいな。

B: レンジでチンすればいいし。

C: 栄養あるし。

A: そうそう。

(3) 『お父さんといっしょ』インターネット 2003年6月<sup>(2)</sup>

I: それぞれの家庭にもよると思いますが、お母さんよりもお父さんとの関係のほうがより人間対人間になるのかもしれませんがね。

E: 大人になってくると離れてみられるようになるし。

K: それは明らかだね。

例文(2)では話し手B、CがAの発言を、例文(3)ではEがIの発言を理解、同意した上で、その話題についての情報を付加していると言える。またここでは「し」がターンの転換の合図にもなっている。このように「し」は相手の発言を理解し、新たな情報を加えるという話し手の命題に対する態度、つまり「認識的スタンス」を表し、会話を展開する上で重要な役割を果たしている。

同時に相手の意見に対する同意という話し手の「情緒的スタンス」もマークしている。つまり、共同発話や談話展開において「し」は話し手の認識及び情緒を表すキーとして機能すると言える。

次に話し手自身の発話を受ける「し」について検証する。

(4) 『秘密』東野圭吾 (p. 107)<sup>(3)</sup>

H: 何だよ、その笑いは。

N: いやあ、やっぱり気になるんだろうなあと思って。あたしだって気になったし。

(5) 『負け犬の遠吠え』酒井順子 (p. 30)<sup>(4)</sup>

“どうしたって感じてしまう負け犬”である、という事実を背負って、私たちは歩いていくしかありません。「神様はその人が耐えられるだけの苦悩しかお与えにならない」とも言うことですし。

例(4)(5)では、それぞれ話し手、書き手が自分の意見に新たな情報を加え、「し」がそれをマークしている。これらの情報とは発言の根拠や具体的な理由である。この情報の付加により、自らの意見や考えを支持したり裏付けたりすることができるとい

う点で、「し」は認識的スタンスをマークすると言える。また、これは佐竹（1995）の指摘する通り、「他にも正解があるかもしれない」という含みを持たせることで断言を回避したり、発言をやわらかくしており、ひいては話し手の躊躇を表わすため、「し」が「情緒スタンス」をも表すことを示唆している。

## 2.2 若者言葉

次に若者言葉における「し」の機能を検証してみたい。堀内（1999）は「しい」を若者言葉の一つとして挙げ、「無意味につけたしたり、次の文に続ける用法がある」としている。

(6)『ガキの頃はバカだったなあ』インターネット 2003年7月<sup>(5)</sup>

小学校低学年のころ（略）物語でも絵本でも最後のページに必ず「つづく」と落書していました。しかもマジックで。全然つづいてないし。

(7)「旬の野菜まるごと」フジテレビ 2003年<sup>(6)</sup>

「ただいま、お母さん。ごはん、できた？ うわ、ナスだし。」

このような文末の「し」は接続助詞として列挙や理由を表すというよりも、どれも自分自身、または相手の考えや行動を叱責、批判するときに用いられ、「し」がそれを和らげたり、暗示したりするという機能を果たしている。それが佐竹のいう「断定回避」の「し」と異なるのは「他にも正解があるかもしれない」という含みがないという点である。例文（6）（7）は「この状況ではおかしい」「私がナスを嫌いだと知っているはず」などという判断に基づいて発話され、話し手と聞き手、または書き手と読み手の間には共通の良識や感覚があることが前提とされている。つまり、この類の「し」はそれが唐突に聞こえてしまう可能性があるにも拘わらず、結果や目の前の状況に言及することで話し手自身の弁解や相手に対する叱責を言外に含ませたり、間接的に異を唱えたりしている。また、発話そのものを軽くしたり、和らげたりもしているのではないか。冒頭の例文（1）のCMにしても「し」を文末に使用している上司は、顔の表情や状況から部下の非常識な行動を間接的に叱責していると捉えられる。よって、話し手の不快な感情や態度を表わすという点で、「し」は終助詞として、話し手や書き手の情緒的スタンスをマークしていると言える。

さらに最近ではこの用法はさらに進化し、時として「あいつ誰だし」「こいつ何だし」というように疑問文に「し」がつく用法が見受けられる。(「シブヤ新聞」2005年1月21日)

(8) <個人ブログ> 2007年4月2日<sup>(7)</sup>

>へたれさん

聖地ってどこだし!?へたれさんってどんな顔してるんだし!?笑  
すげえ難問だらけだけど、僕負けません。

この例文(8)でも「どこだし」「どんな顔してるんだし」と疑問文と共に「し」が使用されている。しかし、この場合、「し」がなくても意味は変わらず、新たに意見の裏づけになるような情報を付加しているわけでもない。堀内(1999)の指摘する無意味につけたされる若者言葉の一つである。よって、この種の「し」は書き手の命題に対する「認識的スタンス」ではなく、「情緒的スタンス」を表わすと考えられる。

「情緒的スタンス」を表わす「し」は、①相手の発話に対する同意を表わす、②文を和らげる、③断定を回避し、協調性を示す、④常識や共通の感覚を基に間接的に相手や自分自身の言動を叱責したり、その場の状況を批判したりする、というように発展し、最終的に疑問文にも「し」が使用されるようになったのではないだろうか。さらに、特に新しい用法はブログや同世代間とのやりとりで多く使用されることから、従来使用されなかった部分にあえて「し」を用いることで、聞き手や読み手との間に仲間意識を喚起していると考えられる。

### 3. 終助詞としての「し」

この章では、「し」が接続助詞ではなく、終助詞として働くことを検証、確認してみる。Morita(2002)は日本語の終助詞が「認識スタンス」を表わすことを立証している。また、Hudson and Lu(2003)は日本語の終助詞「ね」と中国語の「バ」を比較するため、「行動」「会話管理」「情報」「認知」の観点から「ね」についての先行文献をまとめている。これと本稿の「し」を比較した場合、表1のようにまとめられる。

表1から「し」が「ね」同様、「行動」「会話管理」「情報」「認知」のそれぞれの観点における機能を擁していることが分かる。また、「共通感覚」や「ターン」など、「し」が「ね」と共通する機能もある。よって、「し」が接続助詞のみならず、終助詞として十分機能すると結論づけられる。

表1 終助詞「ね」と終助詞としての「し」

観点 (perspective)	ね (Hudson and Lu 2003)	し
行動 (performance)	rapport (Uyeno 1971)	同意、和らげ (叱責など) 断定回避、仲間意識の助長
会話管理 (conversation management)	intensify the level of involvement (Maynard 1989) affective common ground (Cook 1992) turn-management device (Tanaka 2000)	共通感覚 (common ground of sense) ターン
情報 (information)	information shared by the speaker and the hearer (神尾 1990, Kamio 1994)	話題や発言を理解した上での情報の付加
認知 (cognitive)	modality-like functions of 'estimate[yosoku] and assumption [sootei]'. (Takubo and Kinsui 1996)	話題や発言の理解の表示、意見や考えの支持、裏づけ

#### 4. 日本語教育

##### 4.1 教科書における「し」の指導

次に日本語教育での「し」の扱いについて考察してみる。まず、英語話者向けの主な初級の教科書 8 冊 (『げんき』『みんなの日本語 II (本冊及び翻訳・文法解説英語版)』『なかま 2』『Situational Functional Japanese 2 (以下 SFJ)』『Japanese for Busy People II』『Japanese : The Spoken Language』『ようこそ』『Introduction to Modern Japanese Grammar Notes』) を調査したところ、日本語教育において「し」は以下のように指導されていることが判明した。

##### (9) 理由の列挙

『げんき』『みんなの日本語 II』『なかま 2』『Situational Functional Japanese』『Japanese for Busy People II』

田中： もう、バスないわね。

山下： じゃ、タクシーよぼうか。鈴木さんもよっぱらっちゃったし。

田中： そうね。 (SFJ p. 204)

##### (10) 他にもあるという暗示

『みんなの日本語 II』『Japanese as Spoken Language』『なかま 2』

色もきれいだし、この靴を買います。

(みんなの日本語Ⅱ 翻訳・文法解説英語版 p. 21)

(11) 事実などの列挙

『ようこそ』『Introduction to Modern Japanese Grammar Notes』『Situational Functional Japanese』『なかま 2』『Japanese as Spoken Language』  
リサさんはポークも食べるし、チキンも食べます。(SFJ p. 213)

(12) 間接的、やわらげ

『ようこそ』『なかま 2』  
雨がふっているし、今日は家にいます。  
雨がふっているから、今日は家にいます。(なかま 2 p. 209)

## 4.2 日本語教育での考察、提案

### 4.2.1 会話の指導

まず、教科書の説明と「し」が持つスタンスマーカーとしての機能を比較してみたい。前述の通り、「し」は接続助詞としてだけではなく、他の「わ」や「ね」と同様、終助詞としての働きも持ち、話し手や書き手の命題に対する認識や情緒を表わす。そこで、「し」の導入、練習には文レベルではなく、談話レベルで行うべきだと考える。ここで、主な教科書の会話で「し」が使用される場面をいくつか取り上げてみよう。

(13) 『げんきⅡ』 L.13 (p. 6)

店長： ワンさんはどうしてこのアルバイトに興味があるんですか。  
ジョン： おもしろいからです。いろいろな人に会えるし、日本語も使えるし。

(14) 『げんきⅡ』 L.17 (p. 92)

スー： 私の友だちの会社は休みが多くて、残業をしなくてもいいですよ。  
たけし： うらやましいですよ。ぼくの会社は休みも少ないし、給料も安いし、最低です。  
スー： 会社に入る前にどうしてもっと調べなかったんですか。

(15) 『なかま 2』 Ch.4 (pp. 192-193)

リー： はんこはなくてもいいの。

アリス： 小さい銀行ならいるかもしれないけど、大きい銀行ならたいていサインが使えるし、いらないわよ。でも、日本でははんこはあったほうが便利よ。

(16) 『みんなの日本語 II』 L.28 (p. 19)

(息子に英語を教えてほしいという依頼を一度断ったあと)

小川： お茶でも飲みながら、おしゃべりしていただいけませんか。

ミラー： うーん、出張も多いし、もうすぐ日本語の試験もあるし…。それに今まで教えたことはありませんから…。

小川： だめですか。じゃ、残念ですが…。

(17) 『Japanese for Busy People II』 L.5 (p. 53)

鈴木： あ、新しいワープロが来ましたね。

チャン： ええ、これは使い方がかんたんですし、画面も大きいですし、いいですよ。

上記に見られるように、教科書の会話では「し」はやはり、断わる場面や理由を述べる場面に使用されることが多い。しかも、自分自身の発話を受け、サポートする場面がほとんどである。しかし、実際の場面では、相手の発言を受ける「し」の用法も多く見られる。

例文 (2) (3) のように、相手の発言を理解した上で、話題や意見に新たな情報を付加するという機能は、共同発話を促すために重要である。例えば、『げんき II』には “expand the conversation” (p. 195 等)、つまり、会話を発展させていきなさい、というアクティビティーが多いにも拘わらず、初級の学習者にとっては難しく、ペアワークでもすぐに会話が終了してしまうことが多々ある。しかし、「し」が自分の発言だけでなく相手の発言に対しても理解を示したり、新たな情報を加えたりする機能があることや、ターン転換の合図にもなることを学習者が分かっているならば、初級の段階でも容易に会話を協同しながら発展させていけるのではないだろうか。

具体的な例を挙げると、例えば、『げんき II』第 22 課の使役形形の練習には次のようなペアワークがある。与えられたトピックについて話しなさいというタスクに

(18) L.22 (p. 211)

- A: 親になったら子供に何をさせてあげますか。  
B: 子供が楽器を習いたかったら、習わせてあげます。  
A: どんな楽器ですか。  
B: バイオリンとかピアノとか。

という会話例がある。ここからさらに発展させるとすれば、「し」を用いて「ああ、バイオリンやピアノはたくさん教室があるし」と A が言うこともできるだろう。このように、初級の段階でも「し」の機能を知ることが会話を展開していく上で有意義だと考えられる。

また、ナラティブの練習の際にも、「し」は有効である。自分の意見を言う際に「し」で支持したり、裏付けたりできるからである。「し」の使用には、以下のような例も見られる。

(19) 『らせん』 吉本ばなな (p. 72) <sup>(8)</sup>

「やめなよ、行くの」

私は言った。

「だって、ひとりで行かせられないわ、相談に乗ってしまったし。」

彼女は言った。

「それに、興味あるし。行ってみないといいところかどうかわからないし。」

(20) 『LOHAS は名古屋に学べ』 AERA 2006 年 1 月 (p. 58) <sup>(9)</sup>

P: もともと、早寝早起き、というのもロハスの大事な構成要件ですよ。電気も節約できますし。

T: : そういう地域のコミュニティーを面倒くさいと思うのか、実はとても大事なことだと思うのが、これからの日本の岐路になると思いますね。

P: そう、本当は大事なんですよ。誰かが病気するとバーッと広まるし。(略)

『げんきⅡ』には多くのナラティブの練習が課せられている。例えば第 16 課「最近のいい経験について話さない」(p. 91)、第 22 課「子供の時、させてもらえなかったことについて話さない」(p. 218) などである。上記の例文 (19) (20) はナラ

タイプではないが、注目すべきは「し」が使用される典型的なパターンである。初級の段階では例文(19)のように「だって・・・し」「それに・・・し」という決まり文句の形での練習も有効だろう<sup>(10)</sup>。また、例文(20)に見られるように、まず、最も言いたいことを述べ、そのあとに「し」を用いて具体例や理由を付け足して自分の意見をサポートする練習も考えられる。特に初級の段階では一人で長く話させようとすると、学習者はとかく予め原稿を書いたりする傾向にあるが、実際の場面を考えるとスピーチ以外ではそのような作業はできない。そこでまず、最も重要な部分に言及し、「し」を用いてそれをサポートできることを導入、練習すれば、まとまりのあるナラティブが期待できるだろう。このように、日本語教育の現場では「し」を「それに」などの他の単語と組み合わせた決まり文句としたり、パターン化した会話に用いて練習したりすることを提案したい。

#### 4.2.2 書き言葉の指導

最後に、書き言葉での「し」について検証する。最近では例文(5)(8)に見られるように、カジュアルな書き言葉で「し」が文末に用いられるようになった。大学生である学習者が「書く作業」「読む作業」を実際の場面で行うのはメールやブログが多く、相手も同世代の若者が多いと想定される。初級の段階で、話し言葉の「人や状況や叱責する『し』」を導入する必要はないものの、自分の意見をサポートする「し」の導入は必要かつ有意義であると考えられる。特に「和らげる」という情緒的スタンスを表す機能は、特にメールやブログでは多用されていると思われる。さらに、仲間意識の喚起という機能も、様々な場面において認められる。『げんきⅡ』の第23課では「メールを書いてみましょう」という課題も出されている。実際に「し」が用いられた日本人のメールを読んだ上で、書く作業に入れば、同世代間の仲間意識の助長、断定回避、和らげ、といった「し」が持つ機能を駆使しながら、日本語らしいメールを書く練習ができるのではないだろうか。

### 5. 最後に

以上、「し」が終助詞としても機能し、認知的スタンス、情緒的スタンスをマークすることを検証した上で、日本語教育での「し」の指導法について提案した。「し」は話し言葉においても、書き言葉においても、話題に対して新たな情報を加える場合に用いられる。「し」はさらに発展し、和らげ、断定回避、仲間意識の助長、共通感

覚を基にした叱責・批判などの機能を担うと言える。しかし、このような機能が教育の場では反映されているとはいいがたい。そこで、「し」を教える際は文レベルでの指導ではなく、談話レベルで指導することを提案したい。まずは決まり文句的な形で導入し、それを会話の中で意見の裏づけや相手が持ち出した話題について補足する役割を果たす終助詞として練習するのが、共同発話においても有意義であると考え。

今後は本稿で提案した導入・練習を実践に移し、実践報告もできるよう、さらなる研究を進めていきたい。

## 注

- (1) セイコーエプソンオフィリオ コマーシャルフィルム 2004年7月放送
- (2) ほぼ日刊イトイ新聞 (2003) 「お父さんと、いっしょ。」  
<http://www.1101.com/father/2003-06-13.html>
- (3) 東野圭吾 (2001) 『秘密』 文芸春秋
- (4) 酒井順子 (2003) 『負け犬の遠吠え』 講談社
- (5) ほぼ日刊イトイ新聞 (2003) 「ガキの頃はバカだったなあ。」  
<http://www.1101.com/kodomo/2003-07-19.html>
- (6) フジテレビ 『得ダネ!』 「旬の野菜まるごと」 2003年放送
- (7) 個人ブログ <http://blog.livedoor.jp/yoomyself/archives/51490575.html>
- (8) 吉本ばなな (1998) 「らせん」 『とかげ』 新潮社 pp. 63-80
- (9) AERA 2006年1月2-9日合併号 「LOHASは名古屋に学べ つボイノリオ vs. ペリー 一荻野対談」 朝日新聞社 pp. 56-59
- (10) 『みんなの日本語 II』 第28課では「練習A」に「Xし、それにY」(例「残業もないし、それにボーナスも多いですから」) という文型がある (p. 20)。「練習A」とは文法的な構造を理解しやすいように、視覚的にレイアウトしたものである。

## 参考文献

- 飯間浩明 (1999) 「気になる『し』の用法」  
[www.asahi-net.or.jp/~QM4H-IIM/k991110.htm](http://www.asahi-net.or.jp/~QM4H-IIM/k991110.htm)
- 神尾昭雄 (1990) 『情報の縄張り理論』 大修館書店
- 佐竹秀雄 (1995) 「若者言葉とレトリック」 『日本語学』 14, pp. 53-60
- シブヤ経済新聞 (2005) 「意味をしらないまま、語感で操るギャル達の言語感覚」 <http://www.shibukei.com/special/55/index.html>
- 大辞林 [http://jiten.www.infoseek.co.jp/Jiten?pg=jiten\\_top.html](http://jiten.www.infoseek.co.jp/Jiten?pg=jiten_top.html)

- 堀内克明 (1999) 「若者用語の解説」『現代用語の基礎知識』 pp. 1077-1080
- 湯川純幸 (1999) 「言語的相互行為における情緒的および認識的スタンスの標示ーオオクスの指標性のモデルと日本語談話分析」『日本語の地平』 くらしお出版 pp.401-412
- Cook, H.M. (1992) Meanings of non-referential indexes: a case of the Japanese particle, *ne*. *Text* 12 pp.507-539
- Endo, M.S. (1986) *Grammar Notes to An Introduction to Modern Japanese Part 2: Lessons 16-30*, University of Michigan p.91
- Hudson, E.M.& Lu, W (2003) On Japanese *ne* and Chinese *ba*. in K.M.Jaszczolt and Ken Turner (eds), *Meaning Through Language Contrast*, pp.197-212. John Benjamins Publishing Co.
- Kamio, A. (1994) The Theory of Territory of Information: The Case of Japanese. *Journal of Pragmatics*, 21, pp.67-100
- Makino, S. & Tsutsui, M. (1986) *A Dictionary of Basic Japanese Grammar*. The Japan Times
- Maynard, S. K. (1989) *Japanese Conversation: Self-contextualization through Structure and Interactional Management*. Ablex: Norwood.
- Morita, E. (2002) Stance Marking in the Collaborative Completion of Sentences: Final Particles as Epistemic Markers in Japanese. In Noriko M. Akatsuka and Susan Strauss (eds.) , *Japanese/Korean Linguistics* 10 pp. 220-233
- Ochis, E. (1996) Linguistics Resources for Socializing Humanity. In John Gumpetz and Stephen Levinson (eds.), *Rethinking Linguistic Relativity*. pp. 407-437: Cambridge University Press
- Takubo, Y.,& Kinsui, S (1996) Fukusuu no shinteki ryooiki niyuru danwa kanri. *Ninchi Kagaku* 3(3), pp. 59-74
- Tanaka, H. (2000) The particle *ne* as a turn-management device in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, 32(8), pp.1135-1176
- Uyeno, T. (1971) A Study of Japanese Modality: *A Performative Analysis of Sentence Particles*. Pd.D. dissertation. University of Michigan.

## 教科書

- 国際日本語普及教会 (1995) 『Japanese for Busy People II』 講談社インターナショナル
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語初級 II 本冊』 スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク (1998) 『みんなの日本語初級 II 翻訳・文法解説 英語版』

スリーエーネットワーク

筑波ランゲージグループ (1999) 『Situational Functional Japanese 1,2』 凡人社

坂野 永理他 (1999) 『初級日本語げんき I, II』 Japan Times

Endo, M. (1986) *Supplementary Grammar Notes to an Introduction to Modern Japanese*, University of Michigan Press.

Jorden, E. (1988) *Japanese: The Spoken Language* Yale University Press.

Makino, S. (1998) *Nakama, 1,2* Houghton Mifflin College.

Tosaku, Y. (1999) *Yookoso: Yokoso! An Invitation to Contemporary Japanese*, McGraw-Hill Companies.

(ysakaki@kansai-gaidai.ac.jp)